

◆ 今週のコメント

- ・ ウイルス性肝炎(サイトメガロウイルス:CMV)の報告が、1例あります。CMVによるものは、法改正によりウイルス性肝炎(A型, E型を除く)が四類感染症となった平成15年11月以降, 本市では初の報告となります。
- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、5.22(350例)です。本市では、第4週をピークに減少を続けていますが、近畿6府県を含むほとんどの都道府県では、本市と同様に減少していた報告数が増加に転じ、1～3週間前のレベルに戻っています。
京都市衛生環境研究所で、1月以降に、病原体定点からの検体から検出したインフルエンザウイルスの割合は、AH1pdmが80.0%(40例)、AH3型が16.0%(8例)、B型が4.0%(2例)となっています。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数が8.83(353例)で、2週連続して増加しています。年齢階級別では、1歳～4歳が約半数(48.4%, 171例)を占めています。

◆ 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.53(21例)で、本年度で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 5例】
- ・ 五類:ウイルス性肝炎(CMV) 1例【1月以降の累積報告数 1例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	5.22	350
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	8.83	353
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.08	43
	③ 水痘	1.05	42
	④ 伝染性紅斑	0.53	21
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.25	10
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

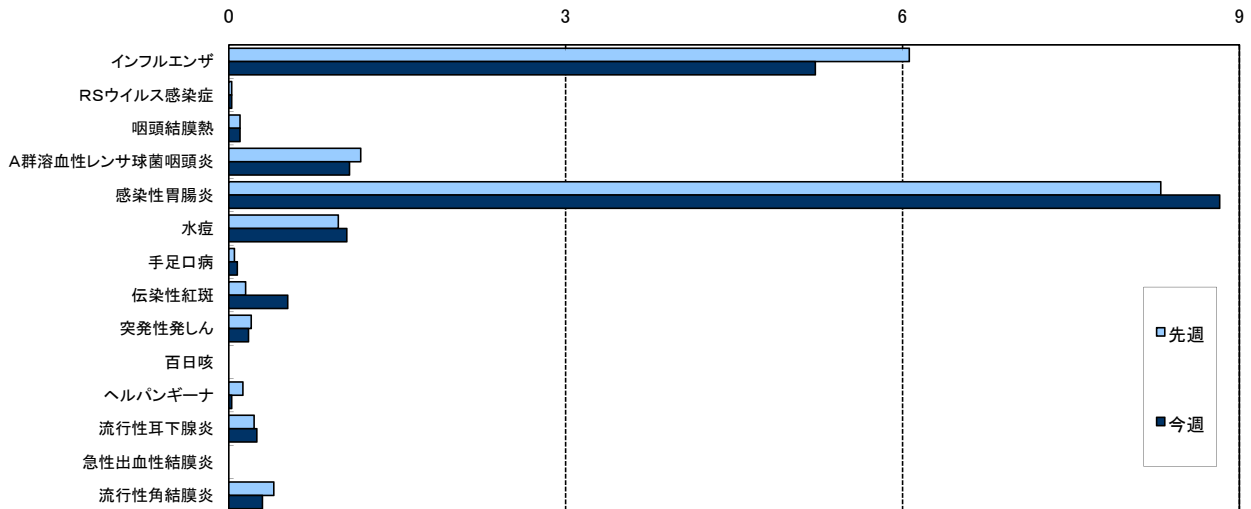
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

(注) 京都市のデータは、平成23年3月17日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

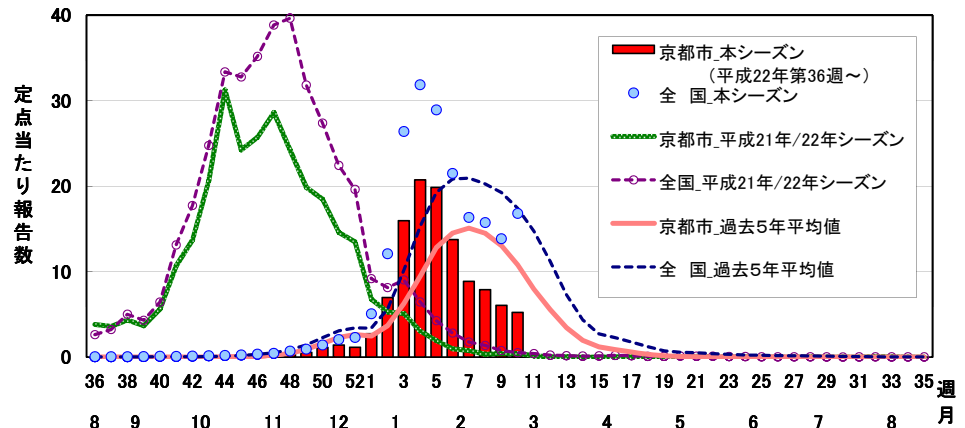
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第10週)と先週(第9週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第6週	921
第7週	594
第8週	528
第9週	406
第10週	350
累積報告数 (第36週以降)	7,615

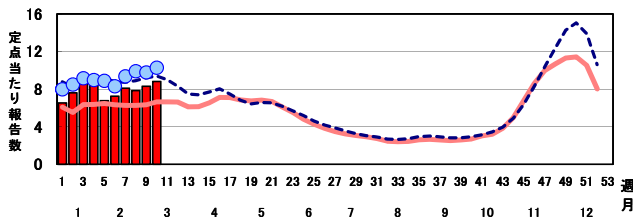


※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

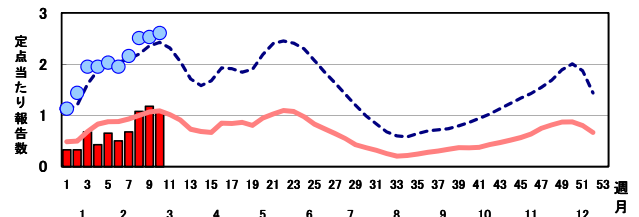
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

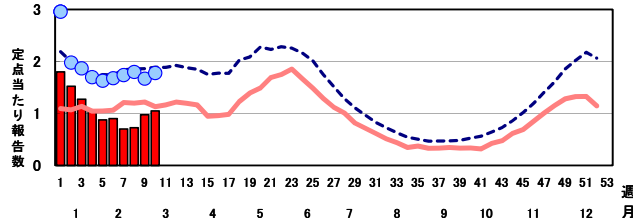
1 感染性胃腸炎



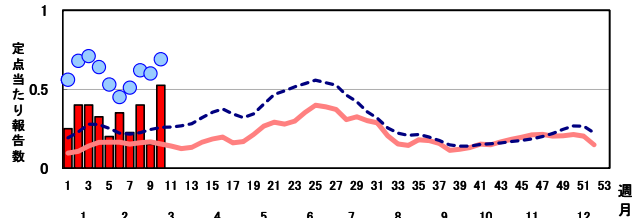
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



3 水痘

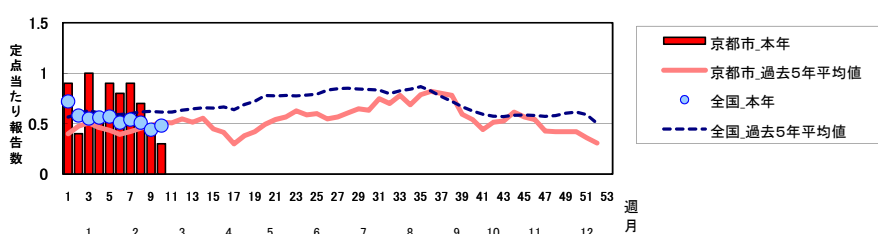


4 伝染性紅斑



<眼科定点>

流行性角結膜炎



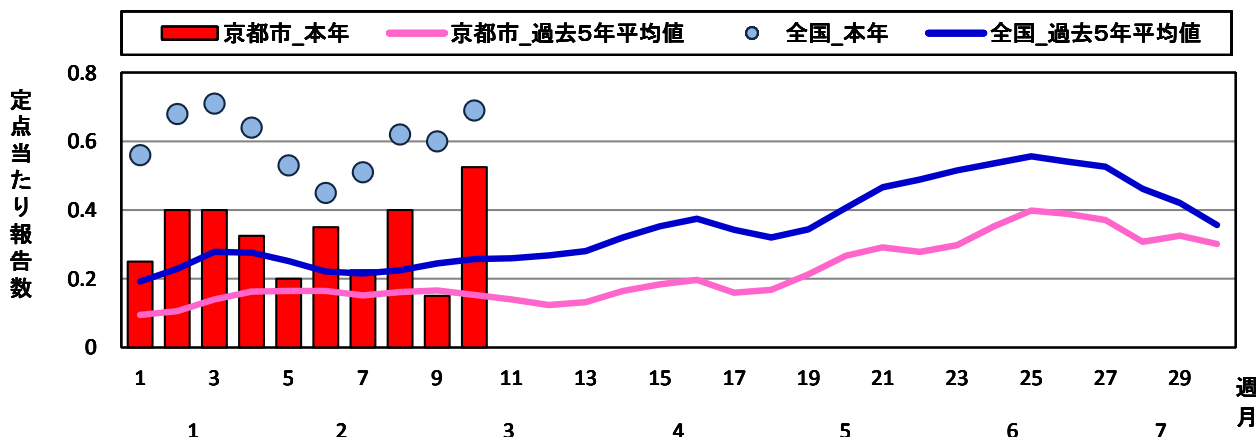
第10週(3月7日～3月13日)トピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.53(21例)で、本年度で最も多くなっており、過去5年平均値の3倍以上となっています。

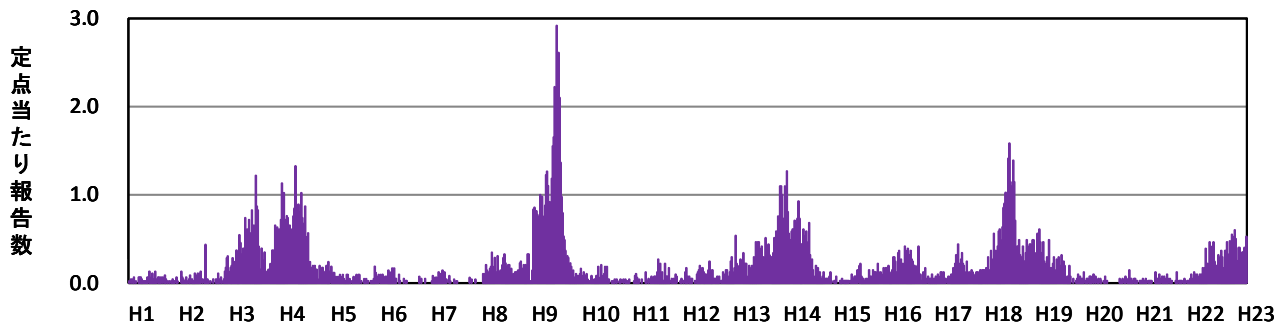
平成元年以降の定点当たり報告数の推移をみると、流行に周期性があり、ピークの間隔は230～270週(4～5年)、ピーク時の定点当たり報告数は1.27～2.92となっています。昨年第33週(8月16日～22日)から続く流行が、今後大きくなる可能性がありますので、動向に注意してください。

年齢階級別割合では、6歳が6例(28.6%)と最も多く、次いで3歳、4歳、7歳が各4例(19.0%)となっており、2歳以下の報告はありません。過去の流行年には2歳以下の報告数の占める割合が、他の年に比べ低くなる傾向があり、今回の流行にも同様の傾向が見られます。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



平成元年～平成23年第10週の定点当たり報告数の推移



平成元年以降のピーク時定点当たり報告数と前回ピークからの期間

ピーク年週	平成4年 第17週	平成9年 第26週	平成14年 第4週	平成18年 第26週	今週 (平成23年第10週)
定点当たり報告数	1.33	2.92	1.27	1.59	0.53
前回ピークからの期間(週)	—	270	239	230	245

年齢階級別割合

